

神○坂砂夜

新聞部存続枕営業

Palette

神○坂砂夜



属性：COOL
クラス：3年B組
部活：新聞部
年齢：1〇歳
誕生日：9月3日
星座：おとめ座
身長：164cm
体重：44kg
B-W-H：88cm-55cm-88cm
血液型：B型
趣味：アクアリウム、マツサージ
好きな食べ物：トマト
嫌いな食べ物：にんじん



聖○学園高等部・廊下

今度の新聞部での記事、聖○学園スポーツ部（仮）の取材のためアポの取れた学生を訪問しようと半ば急ぎ足で廊下を歩いていた神○坂砂夜に一人の教員が話をかけた。

「神○坂君、ちょっといいかな？」

呼び止めてきたのはこの学校の教頭先生でした。

「はい？ 何でしょうか。教頭先生。」

インタビュの件もあるし、迅速に用件を済ませてくれると助かるのだけれど…

「実は今後の新聞部の事についてお話ししたくてね、今お時間いいかい？」

「申し訳ありません。今インタビュの予約を許可して頂いた生徒に会いに行く途中でして、部活が終わった後でもよろしいでしょうか？」

教頭先生は絶えず優しい顔で私と会話をしてくれました。

「ええ、構いませんよ。では今日の部活が終わり次第、教頭室に来ていただけますか？」

「はい、ありがとうございます。」



私は今日のインタビューを終えた後、私の班のメンバー達と打ち合わせを済ませて教頭室に向かいました。

——コンコン——

「失礼します、遅くなって申し訳ありません。」

「いえいえ、部活動ご苦勞様です。そこに座ってください。」

教頭先生は軽く手を広げ、私に指で椅子を指し示めてくれました。

「それで、お話とはいったい……。」

「実は新聞部を本校の部活動から外そうという意見が出ていましたね。」

——
「なぜですか!？」

私は先生に対し思わず声を荒げてしまいました。

「す、すみません。」

「いえ、大丈夫ですよ。まだ決定というわけではありませんが、」

先生の話は続いていました。しかし取り乱していた私は会話に割って入ってしまいました。

「り、理由をお聞かせいただいても？」

「うちの学校は経営陣から多額の支援を受けてなりたっているのですよ。本校を卒業した優秀な学生はそういった経営者の子会社に就職する人も少なくありません。」

「もちろん強制ではありません。ですが少しでも優秀な学生を世界に羽ばたかせる為、毎月の行事、レクリエーション、イベント事などにはとても費用を掛けています。」

私はここまでの話を聞いて、資金面での問題だと悟りました。

「部活動もその一つです。部であれば毎年各部活には部費が入ります。これも聖○学園を支えてくださっている経営者様のお金なのです。」

「そこで今年度の予算を見直したところ、新聞部を部活動から外す提案がなされたのです。」

私は不安な顔で訴えた。

「そ、それじゃあ…新聞部は…。」

「そこまで悲観なさらなくても大丈夫ですよ。」

その言葉を聞いて私の表情は少し明るくなりました。

「部として続けて行くことは出来ませんが、研究会や同好会などの様に生徒が各自でサークルを立ち上げて活動していくことはできますので。」

私は心配していた事を先生に伝えた。

「ですが、そういった場合、活動費や部室の提供は止まってしまうのですよね？」

「ええ、それは致し方ありません。部費は生徒たちで何とかしてもらうしかありませんが、放課後使用したい教室ならいくつかあまっていますので、それは私に言ってくださればご用意いたします。」

教頭先生は顔を曇らせて、残念そうに言いました。

「本当は皆さんのやりたい事が出来ればよかったのですが……」

「いえ、そういった事情があるならしかたありません。」

私は閃きのように思いついた事を教頭先生に話しました。

「あの、教頭先生！」

元気を取り戻した私を見て、ポカンとする先生。

「はい？」

「つまりですが、部として存続の価値があると評価された場合、今後新聞部を部として認めてもらうことはできますか？」

「ええ、もちろんです。先方がそう判断していただければ問題はないかと。今年の夏に7

は意見をまとめて発表すると言っていましたね。」

私
が
夏
ま
で
に
新
聞
部
が
本
校
に
お
け
る
重
要
な
部
活
動
で
あ
る
事
を
証
明
し
て
見
せ
る
わ！

自
宅

私は新聞部の価値を高めるため、学校外のニュースを記事にすることにしました。それが出来れば、世間体からの評価に繋がる。経営陣の目を引けると考えたから。

「とはいってもいつも校内新聞のような形式でやってきただけに、どう取り組んでいいかわからないわね。」

「伝手でもあればよいのだけれど、あいにくそういった知り合いもないし。」

「経営者さんの好みのジャンルから探ってみようかしら…。上手くいけばうちの新聞を気に入ってもらえるかも。」

私は数日かけてプランを練った。けど校外活動には費用も嵩張る。なんとしてもいい記事を作成させないと。

教頭室

教頭先生は私が新聞部を部として存続させたいという事を先方に話してくれたみたいで、今日はその事を管理している役員さんと合わせて頂けることになりました。

教室に入るとすでに先生と役員さんが座っていました。

「おお、来たね。 神〇坂君」

「この度は時間を取っていただき、誠にありがとうございます。」

役員さんは早速本題に入ってくれました。

「話は教頭先生から聞いてるよ。 えっと、新聞部の…。」

役員さんが話し始めると、教頭先生は教室を後にしました。

「では、私は席を外しましょう。人数が少ない方が話は進みやすいでしょうからね。」
一瞬の沈黙の後すぐに会話は始まった。

「…というわけでした、生徒の将来に影響がより大きい部活だけに力を入れていく方針を取っていくみたいなのです。なので新聞部の活動が…。」

話は長く続いたが、私が把握している内容と違いは差ほどなかった。

「…そこでなんですが。」

役員さんは一通り話を終えたと私の隣に座ってきました。

「私のお願いを聞いてくれれば、新聞部存続の件は上に話を通しておきますよ?」

役員さんは私の身体に手を滑り込ませてきました。

「えっ!?!」

私はそう言われて背中に虫唾が走った。こんな奴が人の上に立っているという事実。けど、私はこの条件を飲むしかなかった。新聞部が廃部になれば、将来付きたかった職業が遠ざかってしまう。うちの学校の新聞部はテレビ局との繋がりが強い、3年間活動し部長であるという実績は就職活動で優位に働く。それを失うことは3年間の努力を水の泡にするも同然だった。

「な、なにをすればいいんですか?」

「なあに、すこし私の相手をしてくれればいいですよ、性的なね?」

「くっ…。」





「では行きましょうか」

「は、はい……。これで新聞部の件は。」

「心配いりませんよ、それにこういう事は慣れていきますから。」

神〇坂砂夜

—新聞部存続枕営業—

作/文：Palette

イラスト：Palette/StableDiffusionAI

発行日：2025/04/07

サークル：ぱれっとキャンディ

SNS

Twitter(X)：@pinepalette

Pixiv：users/809327

LinkTree：



※この作品の内容、
テキスト、画像等の
無断転載・無断使用
を禁じます。

また、まとめサイト
等への引用を厳禁い
たします。

免責事項

「成人専用 18歳以上」

このコンテンツへのアクセスは、
18歳以上の方に制限されています。
本作に登場するすべてのキャラクターは18歳以上で、
法的に成人です。

本作はフィクションです。

登場するキャラクター、組織、名前はすべて架空のものであり、
実在の人物や団体とは一切関係ありません。

本作は登場人物の人権と 自律性を尊重して作成されています。

内容は特定のジャンル(ハードコアSMなど)を扱っている場合がありますが、
これらの描写はあくまでフィクションであり、実際の行動を反映したものではありません。

SMは基本的に信頼、同意、 安全を基盤としています。

登場するすべてのキャラクターが、長年にわたり信頼を築き、
お互いの限界を深く理解し、
同意に基づいたロールプレイのシナリオに従っていると想像してください。
本作は現実の行動に影響を与えたり、
インスパイアしたりすることを目的としたものではなく、あくまで娯楽目的です。

※この作品は個人が非公式に発行したものです

公式設定に準拠しているものではありません。